

くすの木通信

三高だより第183号

「質問する力と書く力」

進路課長 井川 美穂

毎年2学期後半になってくると、放課後の教室や職員室で3年生が面接練習や小論文の指導を受けている姿を見かけるようになります。多くの教員が3年生の進路実現に向けて指導に取り組んでいます。先日、小論文の指導をしていた時に興味深い英文を読みました。ある記者が、ノーベル物理学賞受賞者のイジドール・イザーク・ラービにどのようにして物理学者になったのかと尋ねると、彼は母親の話をしたそうです。彼が子どもの頃、学校から帰ると必ず母親に尋ねられることがありました。それは「学校で何を習ったの？」ではなく、「今日は学校で良い質問ができた？」でした。子供たちが質問するという力を最初に身に付けるのは両親との会話を通してで、会話の半分は子供たちから始まるそうです。しかし、学校に通いだすと、会話のやり取りは減ってきます。家庭と学校では、子供と大人の間会話や質問に量的、質的な違いがあり、学校では家庭と比べると会話のやり取りの回数が減り、会話を始めるのはたいてい教師側になります。子供が話す、質問する、情報を求める回数が減り、計画したり、思考したり、話し合いをする時に、言語の使用が減り、知的探求を示す表現も減るということでした。質問をするためには、自分がどこまで理解し、どこが理解できていないかを確認する作業が必要になります。そして自分の意見や疑問を明確にしおくことも求められます。簡単なようで難しいことです。生徒が質問する、教師が質問する。どちらも大切で、教えることと学ぶことの橋渡しができるという意味において質問する力は学ぶこと、教えることの基礎であると感じました。

もう一つは、書くということについての英文でした。書くという行為は科学技術の発達とともに変化してきました。壁面や粘土板に刻む作業がやがてインクを使ってペンで、そして今ではタブレットを使ってキーボードへと書く手段が変わってきました。しかし、どんなに技術が発達しても、書くという行為の本質は今後も変わらないという内容のものでした。コミュニケーション能力という外に向かって発信する力に目がいきます。しかし、その前に自分の意見を育てる必要があります。言葉を知らないと思えるツールに限られます。自分の複雑な心情や、考えを表現する言葉が限られているということは、当然思考も深まることはありません。まずは伝える前に、伝えたいと思うもの発見し、自分なりに考えを深め、それを言葉にして書く。この行為が必要になってくるのです。

この時期、生徒たちは進路実現に向けて必死に問題に向き合い、考え、それを言葉にして表現することに取り組んでいます。指導する側も生徒と一緒にさまざまな文献を読み、新たな課題や興味深い視点を見つけ、考えを共有し、充実した時間を過ごすことができているように思います。